

# 山と博物館

第 8 卷 第 3 号

1963年3月25日



## 雷鳥調査の荷上げ

撮影 高橋秀男

3月14日、無風快晴の天候に恵まれ、大町市日向山から爺ヶ岳種池小屋(標高2450m、ライチョウ調査基地)へ、ベル47G-KH4型ヘリコプター(朝日ヘリK・K、永富武雄氏操縦)によって、五回にわけて約1トンに及ぶ本館の雷鳥調査隊用物資の荷上げが行なわれた。着陸地点は、種池小屋の西方約15m、稜線上のわずかな平地。全体の飛行並びに積下ろし所要時間は1時間38分であった。後立山連峯の稜線上へ、ヘリコプターが着陸に成功したのは、今回がはじめてである。

大町山岳博物館

## 資料 白馬岳小史 (1)

長 沢 武

私はこの山博第6巻第6号に「白馬岳小史」なる拙文を載せたが、紙面の都合で概略にとどめざるをえなかった。そこで今回は、その中の重要な部分または興味を引くところ或はその後の調査で明らかになったものなどを載せ、北アルプス連山の花形白馬岳に興味を持つ方の参考になればと願うものである。

## 一 信府統記と白馬岳

## 1. 三国境と乗鞍紛争

松本の城主忠幹氏が、政事の一助にと享保7年(1722)9月鈴木重武、三井弘篤の二人に命じて草案を作らせ享保9年12月完成を見た、全33巻におよぶ信府統記には当時の県下のあらゆるものが載っていて、非常に史料として得がたいものである。

その第6巻信濃国郡境記四安曇郡には、越中越後飛騨の国と境する主要な山名が載っている。その中の白馬連峯の部分を見ると「越後越中<sup>信濃</sup>三国境」此所モ山名ナクまた通路モナシ、東面ハ信濃ノ国ナリ西ノ方ニテ南ハ越中北ハ越後国ナリ、此山中嶽々幾何トイフ数知レズ信濃國中ハ大山名アル嶽々下ニ記ス、三国境ノ山ヨリ北ハ乗鞍嶽マデノ間モ国界知レズ。「乗鞍嶽峰通ヲ国境トス」越後ノ国ニテモ同名此所ヨリ蒲原古沢姫川落口ノ所マデ山ハ峰通り川ハ中央ヲモツテ国境トス。乗鞍嶽の名称本領ノ中ニ三ヶ所アリ、一ハ前ニ見エタル南西隅ニアル山ナリ、一ハ此ノ山ニテ越後境ニアリまた一ハ信濃國中ノ山ニテ即チ安曇郡大町与塩島新田村ノ西北ニアリこれヨリハ南ニ当ル、享保七年山見通シノコト仰蒙リタル山ノツナリ、委ク大町与山ノ部類ニ載ス。とあり大町与の所にきて、「信越ノ界系びらが峰ノ南ニアル乗鞍嶽ノ事ハ前ニ記シタリ但シ横前鞍、風吹ト云ヘルハ此嶽ニ並ベル山名所ナルベシ此乗鞍嶽ノ西表ハ越後越中ノ国界也又松本領塩島新田ノ西ニアル乗鞍嶽ニ付テ委細ノ事ヲ重テ記スベシ、総テ松本領ニ乗鞍ト号スル嶽三ツアリ内ニツハ隣国ニ境セルモノニテ既ニ前ニ記シタリ今爰ニ載スル所ハ当与塩島新田分ノ山ナリ元禄年中改メラレテ官庫ニ取マル所ノ国絵図ニ載セタル乗鞍嶽ハ国境ニアル所ノ二ツヲ記セルノミニテ此塩島新田ノ乗鞍ハ他国他郡ニ交ハラザル故略シテ載セザリシヲ享保七年公命アリテ山見通シノ為、建部彦次郎ヨリ御指図トシテ官庫の絵図ニ載スル所ノ乗鞍ヨリ埴科郡妻女山ト小果郡根津領湯ノ丸山ハ見通シノ事仰付ラレシ時清水次郎右エ門、木藤仙右エ門、長谷川繁右衛門、中根又右衛門ノ四人ヲシテ山々ヲ見分セシムル所ニ越後界ノ乗鞍嶽ハ当与石坂村ノ西ニアレドモ極メテ高キ山ニモアラザレバ、前ノ高峰ニ支ハラレテ右命ゼラレシ見通シノ山々少モ見エズ。然ルニ此塩

島新田村分ノ乗鞍嶽ハ峯モ極メテ高ク塩島村ヨリ凡ソ七里程登リテモ絶頂マデハ岩壁嵯峨トシテ至ル事叶ハズ乃チ乗鞍ノ前輪後輪ト云ヘル峰ノ中居木ニ似タル平ヨリ之ヲ望ムニ見通シ分明ナレバ(此ノ乗鞍嶽ハ越後界ノ乗鞍嶽ヨリ遙ニ南ニアリテ西裏モ猶信濃ノ地ニテ山々並ビ続ケリ)此ノ旨公庁ニ達シタリシニ塩島千国ノ西ニ当レル乗鞍ヨリ見分スベキ旨命ゼラルニ依リ此山ニ登リテ右ノ山々を見通シ後委シク言上セシニ見分ノ詳細ナル事遠ク他ニ優レタリトテ建部彦次郎ヨリ賞美アリシナリ。

今按ズルニ元禄年中ノ国絵図ハ他国ニ隣レル所々ノ山川ニ至ルマデ両国ヨリ附ケ合セテ国界ヲ定ムル故ニ其方角ヲ郡中ニテ見レバ違ヘル所ナキニシモアラズ況ヤ村里ノ号ハ名ト殺高トヲ専ラトシテ其所在ハ方角ヲモ正スニ及バザルヲ然ル所以ハ一國ノ絵図ニ於テ其大概ヲ載スルガ故ニ土地ノ広狭ニおいて悉ク校正セズ。故ニ此乗鞍嶽モ官庫ノ図ニ任セテ命ゼラレシモノニテ越後界ノ乗鞍トノ異ナリタレドモ塩島ノ山ノアレバ一向違ヘルニモアラズ故ニ此山ニ登リ見分セシトナリ、絵図ニ見エタルハ塩島村ノ西ニ載セタレドモ畢竟越後界ノ乗鞍ナルベシ仔細ハ絵図端書中ニ其意見ニ然レバ今此見通ノ山トハ異ナレドモ同与ノ中近辺ニ同名アレバ時トシテ紛レ誤ルマジキニモアラズ官庫ノ大絵図ハ今後改ムベキモアラザレバ此断リヲ委シク記シ置クモノナリ。」と書かれており、当時の白馬岳周辺の様子と山がどんな存在であったかがうかがわれて面白い。

元禄の絵図はやはり絵図であるため今の乗鞍岳が中土駅の西方の辺に画かれていたわけだが、しかもその位置の辺にやはり乗鞍岳と呼ばれる小山があったということ、今では笑いものだけれども、当時としては一般には高山などそんなに重要な存在でなく、登るものも全くない頃とてこの山見分けは大仕事であったので上役から褒美がでたのである。

さて、前に戻るが、国郡境記の所々各与の所に名ある山が載っている。有明山、餓鬼ヶ嶽、中房山、不動嶽、すばり越、五六嶽、げんのう嶽、鹿島山、餓鬼ヶ嶽、平川嶽、鱧ヶ嶽、乗鞍嶽、風吹峯、横前倉嶽、系びらが峰がそれで、五六嶽は今の爺、げんのう嶽、鹿島山は鹿島槍、餓鬼ヶ嶽は五竜、平川嶽は大黒カ害松、鱧嶽は白馬ヤリと思われるが、ここで大事な白馬岳に該当する山が無いことに気がつく。

## 2. 国絵図と元禄の修正

国絵図は徳川幕府が、正保2年諸国に命じてそれ以前のもの大改正させて作らせ、日本中のものを官庫に納めたのであるが、それから50余年後の元禄10年再び国絵

図改めのことが諸国に命ぜられ信濃の新絵図は同14年に完成したが、その時あびらが峯、横前倉嶽、乗鞍嶽の3山は古図に位置が誤って載っていたので訂正、また雨飾山、真那板山などは古図になかったものをこの時はじめて載せたのである。

官庫に納まるといふこの大絵図は今はどうなっているか、残っているとすれば見たいものである。白馬岳の歴史の謎をとく大きなかぎである。

### 3. 用木薪切り出す山、巢鷹山、鳥屋山と白馬

享保の当時松本藩は山林資源の行財政をどんな方法で進めていたかをみるのは興味あることである。信府統記29巻松本領諸件別記5にそのことが載っている。

「諸木材出ス時ハ元伐奉行トシテ歩行士並山目付役足輕袖改役小人ヲ定メ置キ柵ヲ入レ元伐ヲナサシム。……村ニ小屋アリ米蔵ヲ立置キ柵扶持等ヲ渡ス……諸木伐揃ヘタル節ハ改奉行馬廻ノ者ヲ遣シ吟味ノ上渡入シテ川ヲ流ス……又仕出シ山トテ領分の者元縮ヲ請合柵ヲ入レ伐出シ賃銀ヲ以テ川ヲ流シテ渡場へ着ル、此時モ改奉行同前、渡場ニテハ郷中人足ヲ出シ諸木ヲ積立ル(人足扶持規定メアリテ渡ス)又近年ハ渡場積立共ニ元縮ノ者請合テ渡場ニ於テ間尺ヲ改メ請取ル事モアリ又商売ニ伐出ス諸木ハ請合人順次第運上ヲ定、領分又ハ他所ヘモ出ス」とあり、この後に領内の主要な資源林8ヶ所を上げ、その位置、材種、搬出法など附記してあるが大町組では野口山、大綱山の二ツがあるだけで白馬山麓の山は一ツもない。

次に巢鷹山では大町組中に3ヶ所、鳥屋山では9ヶ所上っていて、鷹を打ちくる者には褒美を出すならわしだったが、これも白馬山麓の名は出ていない。

### 4. かげ薄かった白馬岳

以上信府統記によって、今から250年前の白馬岳周辺の山がどんな立場にあったかが、間接的に調べてみたわけであるが、松本藩としては此の山は軍事上、行財政上全く重要な山ではなかったようであるし、一般民衆としても境界、宗教、狩猟、木材資源などの面でそれ程密接なつながりがあったようにも思われない。もしそおいた面で何か特色があったとすれば当然この書物に載っている筈なのである。

国境の山であり、乗鞍岳以上に三国境の地点の山として記録されるべき山でありながらこの山の名前すら出てこないということ、しかも前山に遮られることもなく3000m級の一連の山が里から見られるという、全国的にみても珍しい数少ない条件を持ちながらであるという点からしても一寸うなずけない問題である。いずれにしろ白馬岳は当時としては全く見むきされない、価値のない山であったわけである。

## 二 白馬岳山名考

### 1. 無名の山白馬岳

山名考といえはその山の名前の出所、由縁を考えることが普通であるが、まず白馬岳では前項でも解るように、この山は250年前の信州側としては、いわゆる名無しの権兵衛であったわけで、一般民家はただ「タケ」として恐れ、うやまっていたようである。

### 2 越中側では上駒ヶ嶽

徳川時代加賀の前田藩は国境警備、資源開発に意を注ぎ、慶長年間には既に黒部奥山廻りをおき、寛永年間には絵図作成の見分登山が行なわれたのであるが、今に残るその絵図からして越中側では上駒ヶ嶽と呼んでいたことがうかがえる。

### 3. 越後側では大蓮華山又は蓮花嶽

越後側は蓮華銀山、蓮花温泉など古くから開け、蓮花岳として関係者に知られていたもので、蓮華温泉の名前をみてもそれがうかがえる。又富山県でも朝日町にある大蓮華山保勝会は、現在でも白馬岳を大蓮華山としてはっきり観光宣伝を続けている。

一方長野県としても明治の初めこの山にはっきりした名前がなかったが県内での第3位の高山として山名を入れなければならなかったため、諸所調査の結果その統計書に蓮花岳の名前を付けて発表し、明治の中期迄これを訂正せずに来ている(明治39年北安曇地誌より)し明治22年信濃教育会編さんの長野県地図にも蓮華岳となってい



八方池の風除地藏

る。

#### 4. 代馬から白馬へ

さて最後に代馬か白馬かは現代人の良く議論される処であるが、いずれにしろ正しくはシロウマというべきで白馬という漢字がこれに使われるようになったのは一般的には、明治26年山頂に一等三角点が撰点された頃から大正2年5万分の一「白馬岳」が発行されたその頃からである。(詳しくは明治30年頃からで、ウェストンの登山記録、「日本アルプス登山と探検」には第一回登山の明治27年は、蓮華温泉方面から登頂した関係もあるかもしれないが、「大蓮華山」とあり、第二回登山の大正2年の所では「白馬岳」となっている。また近代登山第一号の河野齡藏氏の登頂が明治31年8月で、翌32年5月にその記録を「白馬岳に登る記」として、信濃教育153号に発表している。)

参謀本部はその頃模糊としていた山名の統一という面では大きな功績があったが、その山名に如何なる漢字を用いるのが正しいか、もう少し慎重であってほしかった。白馬岳周辺を見ただけでも、雪倉岳と鉢ヶ岳がこの時から山名がすり変ってしまったり、蜂ヶ岳が鉢ヶ岳、平川が白川になったり、当時の測量員館澤彦氏も大変なあわて者であつたらしい。いずれにしろこの山の名前の起



大日岳山頂の大日如来

りは融雪時、黒く現われる山肌の馬形が丁度山麓では田植の代かきの時期であることから、代かきの頃山腹に馬形が現われる山、「代馬嶽」と山麓民から呼ばれたものであることはほんとうであろうから、この山名にふさわしい漢字は「代馬」でなくてはいけないわけであるが、この民衆の中から生れた素朴なほんとうに親しみ易い「代馬岳」という山名はいつたい何時頃から生れ呼ばれたものであろうか？そしてこんなす晴らしい名前がどうして他郷の人にまで知られなかったものなのだろうか。筆者は未だ「代馬」という山名が用いられている古文書や絵図を見たことがなく、私の求めている謎の一つである

以上が白馬岳の越中、越後、信州側における呼称であるが、往時一つの山について同一の側においてすら幾つかの呼び名があった頃のこととて(例えば鹿島嶽は鶴ヶ嶽、槍ヶ嶽、乗鞍嶽、シシヶ嶽、背寛嶽、肩寛嶽、鹿島大嶽などの異名を持っていた。)実際この山を境とする隣り合う国とはいえ、遠く離れた三国では仰望するに形姿異なり、何人も同一の山と思えなかったことは推察するに難くなく、従つてそれぞれの国においてはこの山を異なる山とし、自分達の山として呼んでいたにちがいない。ほんとうに「山深ク嶽岨ナル故通路ナシ、山中嶽々幾何トイフ数知レズ山名モナシ」という所が事実であつたわけである。

### 三 大日如来と地藏菩薩のこと

このことは第6巻第6号に載せたのであるが、その後の調査で判明した所があるので一寸記しておく。

#### 1. 大日岳の大日如来

大日岳山頂の大日如来の石像は享和元年(1801)の建立である。石像の側面に次の文字が彫まれている。「享和元西六月二十四日糸」最後の糸の字以下は砂岩であるため長い年月の間に既に破損してしまひ無いが、どうやら糸魚川方面の人物が背負い上げたものと思われる。

興味の中心はこの石像がどちらの方向を向いて最初祭られていたかであるが、この石像、軽量であるためと山頂はガラ場で大岩なく移動が自由にできるので今はそれを知る由もない。

#### 2. 天狗池の地藏菩薩

語り聞くこの延命地藏を探して2年、先年ようやくその位置を確認したのであるが、天狗池の南斜面を300m程湯ノ入沢へ下つた岩窟の内であった。岩窟の入口は八方池の方を向き、高さ約1m、奥行き2m余で全く雨のかゝらないその奥に石仏を発見することができた。

一見して驚いたことは、この延命地藏八方池のものと同様に、総体の形、寸法もほとんど同一のものであることであつた。しかも岩窟内のため製作当時そのままの細かいノミの跡が見られる素晴らしいものであつた。石仏の側面には慶応35年(1867)立之とあるのみで、建立主が誰であるか知ることができなかった。尚石仏の側に



天狗の池の延命地藏

は「維持明治廿三年四月八日」と墨書された棟札のような木札があったが、下部は朽ちて不明となっていた。考えてみるとこの岩窟は私1人ではついに探しあてることができず、天狗小屋の従業員に依頼して天狗岳一帯を幾日もかかって探しようやく探し当てたもので、今から100余年前の慶応年代既に白馬岳一帯はそおとう詳しく調べられていたことがうかがえるのである。

#### 四 鐘温泉引湯と大遭難のこと

鐘温泉は古くから山麓民に知られていたようであるが何にしても場所が白馬鐘直下の岩壁の下で、ナダレの続発する標高2,100mもある危険な所であるので、湧出するまま放置されていたのである。しかし明治維新と共に入山も楽になり、たまたま産業開発、文明開化の新しい空気が世間に広まりこの温泉の開発を夢みる者がでてきたが、地元の細野部落でも明治5~6年頃から引湯話が持ち上り、明治8年いよいよ丸山九一氏ら3人の実力者によって計画は進められ、同9年7月工事に着手したのである。丸山盛代氏は部落にあつて総まとめ役、丸山幸吉氏は八方飛んで外交と資金の調達、丸山九一氏は現場監督と分担も決つて、人夫は地元民を始め、南安の島々稲核方面から大量60人近く集め、竹樋5,300間をもってこの温泉を引湯、三次郎を経て二股に浴舎を建て、営業

しようというもので、工事を急いでいたのであつた。

(丸山記録) 明治九年拾貳月丸山弥左衛門

信濃国安曇郡鐘ヶ嶽温泉引下ヶ續書

地元北城村之内細野耕地

- 一、竹樋五千三百四拾間 湯元より宇二股迄里程式里拾七丁 此代金四百円五拾銭 但シ沓間ニ付代金七銭五厘
  - 一、ツギテ木式千六百七拾口 此代金 三拾貳円四銭 但シ沓口ニ付代金二厘
  - 一、縄五百三拾四束 此代金 三拾貳円四銭 但シ沓束ニ付六銭
  - 一、人足六拾人 但シ沓人ニ付沓間八銭九厘 此代金 七百五拾円 但シ沓人ニ付拾貳銭 五厘
  - 一、大工三百九拾五人 此賃金四拾九円四拾貳銭五厘 但シ沓人ニ付拾貳銭 五厘
  - 一、並人足四百九拾八人 但シ竹樋継手木縄持運人足 此賃金四拾九円八拾銭 但シ沓人ニ付拾銭
- 合計 金千三百拾参円八拾四銭五厘

(白馬岳志雑改 中島正文 「山岳」第46、47年より)

険阻なこの高山での引湯工事は、竹樋で2里半も下まで引湯するという、又ナダレの為に毎冬季間破かいされ、しかも半年以上使用不可能なこの引湯計画はまったく幼稚なものであるが、たまたまこの明治9年は寒波の来襲早く、旧暦の9月に入った時には白馬岳一帯には既に新雪が来ていた。

9月23日、この日は前日と打って変つて里では風こそ寒いが快晴で、黄金の稲穂を前に村では豊作を祝う祭り太鼓が鳴り四ツ谷の三夜原では小屋がけも賑しく田舎芝居が始まっていたのであるが、その時山から遭難の凶報が入り、居並ぶものは総立ちとなり泣きさわぎ、芝居は中止となつたとのことである。

その前夜白馬岳一帯には1.5mにおよぶ新雪が降り、監督の丸山九一氏はただちに工事を中止し、資料を撤収して村へ帰ろうとしていたのであつた。氏は一たんは三次郎を六左衛門の方へ下ろうとしたがナダレの危険があるので人夫を再び小屋へ帰らせ一服し、小日向山へ廻ろうと考えていた時であつた。風よりも早く音もなく襲つた新雪雪崩は、一瞬にして21人の命を奪つてしまつたのである。この遭難で地元では丸山春太郎、高橋兼吉丸山徳太郎、丸山毛佐、丸山己之吉の6人が死亡したのであつた。全員の遺体は孤包として今の火の見やぐら近くにあつた郷倉の前迄下げ、こゝで検死がなされたのである。これは白馬岳遭難史上最初で最大の惨事であつたわけである。

(山博調査員、白馬村役場勤務)

## オナガについて

長 沢 修 介

## はじめに

近年都市の発達と観光開発は目まぐるしく、多くの原野や森林が切り開かれその姿を変えて行き、野鳥の楽園であった緑の原野は年と共に数が減って行く。又一方近代農業の発達も化学薬品の使用により野鳥には大きな脅威となってきた。昔はあんなに多かった燕の数もここ数年特にその数を減少し、又もっとも人間に密接な関係にある雀でさえ数の減少は否めない事実となってきた。

そんな中であって唯一種このオナガのみは近年当地方においては年々数を増し又繁殖地を広げつつある。

当大町地方への渡来は正確には解らないが私の確認は昭和28年の春であった。その頃は私もまだ良くこの鳥についての知識は持っておらずただめずらしい鳥を見たというにすぎなかった。それで帰って本を調べあらためてこの鳥についての知識を持ち当地方には今迄繁殖例がないことが解り興味を持ってこの鳥の繁殖を見守るようになった。

## 一般習性

オナガは当地に繁殖を始めて約10年位、ペレーをかぶった様な頭部の黒色と体全体の淡い青色が美しく名前の通り他の鳥に比べて体長よりも尾が長い。飛び方はゆるくふわふわと飛び、飛んでいる時に特に尾の長いのが目立つ。悪声で「ギヤー、ギヤー」或いは「ゲェウィー、ゲェウィー」と大声で鳴くのですぐわかる。日本特産の鳥で、本州と北九州の一部に限り棲息しているが、本州でも局部的に棲息し、特に関東平野には多い。県下でもその棲息地は局限され各地では見られない。冬季は20~30羽の群を作って村落地帯を飛びあわしている。一つの林から他の林に渡る時は村のはずれに集り最初1羽がひらひらとうつる。他の者はそれを見ていて一羽が渡ってしばらくしてから何も起らないと「ゲェウィー」と鳴いてぞくぞくとうつる。これは人家の庭の柿の実を食べに来る時も同じで最初は少し離れた木に集結して少し静かにして、そのうちに1羽2羽がひらひら柿の木にうつりしばらくあたりを警戒し何も起らないと一口ガブリとやる。それを見てからあとの者はばらばらと柿の木にうつり柿を食べる。もしその場合何かあやしい者や近くに人を見つけると「ギヤー」と鳴いて飛び去ってしまう。又群の附近に人や犬などが近寄ると「ギヤー、ギヤー」と警戒声を発し仲間知らせてすぐに飛び立ってしまう。仲々利巧で集団性の整った鳥である。又この鳥にはリンゴも好物の一つである。秋には林などに接した所のリンゴ畑はよく被害をこうむる。それも、国光よりは、紅玉の方がやわらかいためよく食べられる。そして木の梢の良く熟した色の良い様なものからやられてしまう。



見張りをするオナガ

又畑のトマトなどにいたずらをして農家から苦情が出たりする。しかし森林の毛虫のような害虫でも沢山食べ林に生活することの方が多いため害よりも益の方がはるかに大きい。

## 安曇平における分布

現在のオナガの棲息している場所は安曇平の木崎湖以南のほとんどの地域に広がっている。しかしあまり山寄りの地帯にはその姿を見かけず平地の方が多様である。特に市街地よりも一歩外れた村落の家が点在する様な所に多い。安曇平では大町以南穂高町の辺り迄は特に高瀬川を主軸にその西側の松林や疎林が主に彼らの棲息及び繁殖の地帯となっている。冬季間はそれにそった両側の村落附近で餌を求めている様子である。それが大町に入ると昭和電工大町工場を界にしてそれよりも西側に多く柿ノ木、高根、野口、大原、大出、二ツ屋と高瀬川及び鹿島川の両岸の市街地よりも少しはなれた村落附近に多く市街地の東側にはあまりその姿を見かけない。鹿島川にそって北限は大体源次部落辺り、二ツ屋から鹿島部落に通ずる道が鹿島川を渡る地点である。又借馬、木崎辺りへも出現するが冬季が主で繁殖地にはならない。それで木崎湖を界としてこれより北は両側に山がせまっているためその姿をほとんど見かけず又繁殖の例もないようである。以上冬季の棲息迄含めてその棲息地帯を書いて見たが当安曇平への渡来初期には何処で繁殖したかそれは確たる記録はないが私の調査によると昭和28年4月たった1羽を現在の柿ノ木の市営住宅の付近で見かけたがその年はついに繁殖の実例を見るまでに至らなかった。まして松川や穂高の方でもその例がなかった様子。その年の冬も姿を見ずこの土地で繁殖はないものとあきらめ

ていた。所が29年の春、3月下旬に先年と同じ柿ノ木地籍にて3羽を見かけ先年のものが蕃殖した確信を深めついにその4月これも今は切り払われて現在は関電の骨材採集場になっている場所の松林の中に2巣を見つけることができた。そしてその年の秋9羽の群を高根から野口辺り迄に見かける様になった。

所がこの初めの蕃殖地が関西電力の黒四ダムの工事のため切り開かれ昼夜の騒音と埃をかむり全く彼等の棲める場所ではなくなってしまつて、折角彼等が安住の地を得たのにと思つて見ても私にはどうすることもできず唯文明というものが怨めしく思われた。そして彼等が何処かに去ってしまうのではないかと心配したが幸にして次の年にはそれよりも1Km位はなれた場所に3巣を認め又野口の川原の松林にも柿ノ木の松林にも営巣を確認し胸をなで下した。その後この辺の松林はほとんどが切り払われてしまひ彼等はやむなくこの川づたいに上は二ツ屋方面へ、下は順次松川の方面へと伸びて行ったものと思われる。現在では有明や鶴高のワザビ畑の中にも疎村から疎村へと飛ぶ少群を見ることが出来る。

#### 営巣

当地において蕃殖を始めてから2年目、始めてその巣と卵を見ることができた。蕃殖期に入つても他の鳥の様にあまりばらばらにならず一つのコロニーを作つて蕃殖しているようである。私の見た例では1つの巣から5m四方位の所に3巣もあった。そしてその木の近くに近寄ると「ゲーウィー」と高々と警戒声を発し他の応援を求め3羽4羽と集つて来て「ギャーギャー」と騒ぐ。巣は針葉樹に作られ人のにぎりこぶしが一つ入る位の大きさ。いずれも沢山葉の繁つた所を選び外見はほとんどわからない。外側は枯枝などを用ひ内側には細い木の根か枯草を用ひてあつた。淡い縁褐色の地に褐色の斑点のある卵を5~6個産んであつた。当地のものはあまり高い所へは巣を作らないようで私の例では最低50cm位のネズ

の木の繁にあつた。ネズの木は葉がトゲの様になっているのであまり他の鳥は巣を作らないのであるがオナガは良くこの木を使用する。私の目撃したものは半数がこのネズの木の中にあつた。他に適当な場所がないでもないのにこの木が好きなのかも知れない。今迄にネズの木を営巣に利用したものはオナガを除いてはモズの2例を見たに過ぎない。

#### 飼育してみた

当地にオナガが蕃殖を始めてから4年目、ようやく附近の人達がこの鳥に気が付きだしそれと共に子供や心ない人達によって巣が荒らされ始めた。31年初夏この鳥の巣立ち直後の雛を一羽子供が取つて来たのでといつて近所の人からもらい受けた。頭のペレーもまだ真黒にならず白髪が生えたように白い毛が沢山出ており尾もまだ短かくてとても可愛いく人の顔を見ると「リエイ、リエイ」と真紅な口をあけてはエサをねだつた。カゴには入れず直接部屋の中に放して育てた。私は昼間家にいなかったの姉にたのみ10分おき位つづにえさをやつてもらひ育てたが始めは仲々手のかかる鳥だと思つたがそのうちになれるとその部屋に近づく戸の近くで待つていて「リエイ、リエイ」と大きな口をあいてエサをねだる様はとても可愛いくつい何も忘れて何時間も遊んでしまうのであつた。2週間位したらもう自分でエサ鉢からエサを取つて食べるようになり部屋の中もあちこち自由に飛べるようになった。そうなる所持前のいたずら心を出してあるもの見るもの何でもつづいて見なくては気がすまず手当り次第何でもひっくり返したり破つたりつづいたり部屋の中は散らかし放第、一つにあきると次々と新しいものを見つけては遊んでいた。又食事の時はいつも人の肩に止つていておいしそうなものを見るとちょいと横から嘴を出して叱られたりした。この鳥に「ピー公」という名前をつけておいたが外に出ていても「ピー公」と名前を呼ぶと「リエー」と答えさつと肩を飛んで来て翼を下げてふるわしながらあまえてエサをねだるのであつた。しかしこの鳥は子供を見ると頭に上つて毛を引っぱつて困らせたそれがもとである日事故を起しあえない最後をとけてしまった。それから後家人がどうしてもこの鳥を欲しがり他処から今度は成鳥に近い雛をもらひ受けて来て今も育てている。今度のは前の経験もありカゴの大きいのを作つてそれに入れ時たま外に出すことにした。私の家には一匹のセッター種の犬がおり面白いことにこれと共棲している。犬が眠つている時や物かげにいる時など他の犬や猫が来ると大声で「ギャーギャー」と鳴く。これを聞くと犬は何処にいようと一目散にかけつけて勝ち番に出る。又家人と他の家の人を見分け家人が帰つて来ると翼をふるわせ頭を下げて「ルルルル…」と喉をならしうれしがる。我家では二代目ピー公もすっかり家の一員になってしまった。私も今迄何種類も鳥を飼育してみたがこれほどなつき、情のうつるものはほかにはなかつた。



休息しているオナガ

# 雪山に40日

## 積雪期ライチョウ調査はじまる

北アルプス爺ヶ岳(標高2669m)一帯において、積雪期のライチョウの生態を調査する本館のクマ鳥調査隊一行は、去る3月12日、扇沢出合より南尾根に入山した。

調査隊は本館職員高橋秀男(隊長、装備主任)、平林国男(調査主任)、千葉彬司(食糧、記録主任)の3名に通信連絡を担当する自衛隊松本駐屯部隊の福園功陸士長、和田全弘一等陸士の二名を加えた5名。当日は普沢六海他7名の第一次支援隊を含め12名が入山した。一行は南尾根の標高2100m地点にキャンプ、翌13日午後、調査基地種池小屋に到着、直ちに基地建設に着手、明けて14日、支援隊は下山、一方、日向山からヘリコプターによる食糧、研究器材、燃料等の物資空輸が行なわれた。

今回の調査は一昨年行なわれた夏の生態調査について積雪期の生態を明らかにしようとするものであり、4月20日まで40日間にわたって継続される。



爺ヶ岳南尾根を行く調査隊

## 山行を思う

職場とうちとの気ぜわしい生活をくり返していると、しみじみと山をみることを忘れてしまっている。高校卒業のころ京都へ修学旅行した時、京都大学近くでいっしょになったその土地の五十年配のおやじさんが、「銀閣寺をとうとうみないうちに焼かれてしまっとな……」と笑っていたのを思い出す。

全校登山や生物部に友だちがいたことなども手伝って、登るともなくあちこちの山へ登ることができた。蓮華や八方などへはよく登ったものだった。

そのころ担任の伝田恒夫先生に慎有恒の「山行」をすすめられ、すっかり山がいいものだと思うようになった。木目の浮き出た白表紙の古本を松本で探したときはうれしかったことを思い出す。マッターホルンの偉容さや、谷間にこだまする牧童の角笛や、カラコロと首に鈴をつけた羊の群などが澄みきったように書かれてあった。さらにアイガー東壁の初登攀の様子が、その困難さにもかかわらず、たんたんと書かれてあったが、そのことがかえってまた慎さんの人がらがしのはれて感めい深かったように記憶している。

その後、これがきっかけとなり、浦松佐美太郎の「たった一人の山」、や田部重治の「山と溪谷」を読んだりもしたが、「たった一人の山」などもいい本だった。最近になってヒラリーの「わがエベレスト」を読みたいと図書館から借りてはみたものの、そのままになってしまった。

同じ山をみても、年を経て、生活経験が深まるにつれて、その味わいも違ってくるように思う。そして、こんな理くつはどうでもいいのだが、すぐれた人だけが山の美しさをもっと深く感じているように思う。これはまた別のことにも言えるようだ。

理くつとはとにかく、こんなに近くに立派な山々があるのだから、シーズンにはせめて二、三回は登ってみたいものだとつねづね思っている。

私は思う

白塩町 飯沢茂雄

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。  
大町山岳博物館

山と博物館 第8巻第3号 1963年3月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上仲町  
信州印刷大町工場